



双幅
江戸時代後期
紙本墨画淡彩
各167.0×87.2cm
三重県立美術館蔵

CHRONICLE
OF MIE
VOL. 9

【美術編】

山口泰弘 やまぐちやすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

月僊 赤壁図

伊勢山田、寂照寺の画僧、月僊。
雪舟の流れを汲みながら、
応挙に師事し、
燕村にも学ぶなどして、
独自の画風をつくり上げていった。
そこには、伝統にこだわらない
新しい表現が息づいている。

はっ ぼく
澆 墨惜まざるは谷文伍か、僧月仙は
此れに反し、瘦筆乾擦し、後淡墨
を用ひて、少しく之を湊合す、蓋し谷子は、
大に古法を存す、月仙に至りては、専ら新裁
に出で古法全く尽く

たっぷりと惜しげもなく墨を注ぐように使っ
て豊かな画を描くのが谷文晁であり、画僧
月僊 (1741~1809) は、対して、(墨を惜し
むかのように) 枯れた筆で擦るように描いて
その後に薄い墨で墨調を整える。文晁の画
には伝統が息づいており、月僊の画からは
発想の新しさが溢れる。このように言うのは
田能村竹田。文人画家竹田が著した『山
中人饒舌』(1835年) は、江戸時代を通して
最も優れた画論書の一つといわれるが、そ
のなかに現れる月僊評である。「谷文晁」
「谷子」というのは画人谷文晁 (1763~
1840) で、当時、江戸画壇に大立者として
君臨していた。伊勢山田 (三重県伊勢市)
の寂照寺という廃寺に近い小さな寺の一
住持に過ぎない月僊を文晁と比較するの
は、破格の扱いといってよい。月僊は「月仙」
とも表記されることがあり、竹田もこれを採る
が、僧として得度した際に与えられたのが
「月仙」で、若年期の画には「月仙」と款記
することが多く、画風確立期以降は「月僊」
を用いることが圧倒的に多くなった。僧とし
ては月仙、画人としては月僊というところ
であろうか。

竹田のいう「瘦筆乾擦」を最も端的に具
現したといえるのが、今回取り上げる「赤壁
図」双幅である。

月僊は名古屋の商家に生まれ、得度して
後、江戸の浄土宗増上寺で修行し、京都
の総本山知恩院に移って数年を過ごした
あと、安永3年 (1774)、34歳の年に知恩院
末寺の伊勢山田寂照寺に第8世の住持と
して派遣された。

江戸にいるころから、月僊は、室町時代
の画人雪舟の流れを汲む漢画派の中で頭

角を現しはじめており、京都に移ってからは
円山応挙の高弟の一人として写生画を描く
一方で南画派の与謝蕪村に私淑するな
ど、さまざまな画風を貪欲に取り入れていっ
た。数多く残る月僊の絵画は、月僊様式と
呼ぶことができる独特の作風を示している
が、応挙から借用したモチーフを与謝蕪村
風のやわらかい淡彩山水で包み混んだ、
写生と南画の折衷の上に個性的作風を加
味した固有の様式といえる。

山水画に限らず人物画の場合も、様式
成立後の月僊画は、竹田が「瘦筆乾擦」と
端的に表現した一種素描的な画風を示し
ているところに月僊様式の大きな特色が
あるが、このような様式獲得の要因を竹田は
「多作に因る」(『山中人饒舌』)と判断して
いる。確かに多作を可能にする簡明な描法
であることは疑いない。しかし着目すべきは、
この素描的で簡疎な表現に、竹田が「新
裁」という言葉を当てて評しているところ
にある。対立軸として置かれた文晁の画風が
「古法」つまり古来の伝統的画法を祖述し
たところに留まるのに対して、伝統にこだわ
らずに新しい表現の創出に取り組んだ結
果、「時輩に比するに、^{はる} 遥かに異れり」(『山
中人饒舌』)、すなわち、同時代の画壇とは
大きく異なる独自の画風をつくり上げたとい
うのである。

寂照寺は、伊勢神宮の外宮・内宮の間
の歓楽街古市にあり、そのため破戒僧が続
き、当時無住となり衰微を極めていたとい
う。月僊派遣の目的は同寺の再興にあったとい
われるが、月僊もそれに応えた。画を売って
得た画料をもとに、併せて1500両を山田奉
行に納め、その利息で長く貧民を救うなど
社会事業に尽くした。これは月僊金と呼ば
れて、明治時代に入っても活用されたとい
われる。また画料を資として、山門、大殿、庫
裡、書院などの改修再建、経蔵の建立と鉄
眼版一切経を購入するなど、荒廃していた
寂照寺伽藍の再興も行った。

この画の画題「赤壁」は、湖北省を流れる
長江流域の地名で、蜀の劉備と呉の孫
権の連合軍が魏の曹操と激烈な戦い (208
年) を繰り広げた「赤壁の戦い」の舞台とし
て『三国志演義』などでも馴染みが深い。

後年北宋の時代に、黄州 (現在の湖北
省内にある) に流刑の憂き目にあった詩人、
蘇軾 (東坡) が前後二度赤壁に遊んだ。そ
の際、それぞれ「前赤壁賦」「後赤壁賦」と
いう詩を詠じた。この故事が、その後長く中
国や日本の文人の間で理想の境地と仰が
れ、絵画の重要な主題となった。



【1】月僊「僧形立像」(部分) 三重県立美術館蔵
僧形の立像であるが、月僊の自画像ともいわれる。自画像は、明治時
代以前では、極めて珍しい。

【2】六祖像 寂照寺蔵
中国禪宗の第六祖慧能(えのう)を描いた図。寺男として米つきに従
事したといわれることから、このような図像が生まれた。竹田の「瘦筆
乾擦」を人物画で代表する画。

【3】月仙上人之碑
月僊の没後、弟子たちによって顕彰碑が建立された。

【4】寂照寺境内
手前に顕彰碑、中ほどに月僊の石像、奥に本堂が見える。